今どきの娘ども

佐藤愛子

今どきの娘ども

佐藤愛子

集英社

今どきの娘(むすめ)ども

一九八七年一〇月二五日　第一刷発行
一九八八年　二　月二〇日　第三刷発行

定　価　九八〇円
著　者　佐藤愛子(さとうあいこ)
発行者　堀内末男
発行所　株式会社　集英社
〒101　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
出版部（〇三）二三〇―六一〇〇
電話　販売部（〇三）二三〇―六一七一
製作課（〇三）二三〇―六〇八〇
印刷所　凸版印刷株式会社
検印廃止
乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

© 1987 A.Satō, Printed in Japan
ISBN4―08―772624―X C0093

今どきの娘ども●目次

女の館の正月は　7
娘がデイトに誘われた！　21
恋愛病患者　35
無邪気なヒナゲシ　48
赤いオープンカー　62
処女の値うち　75
マクの調子　88
これがハンサム!?　101
待ちに待った恋のはじまり　115
男は顔？　128

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ヤッタ」か「ヤラヌ」か　141
処女受胎　154
二幕目は始まった　168
ああ、我老いたり　181
コドクのキツネ　194
女の甲斐性　207
なりゆきセックス　219
鈍感大人（タイジン）　232
最後に●　245

装画●峰岸　達
装幀●安彦勝博

今どきの娘ども

女の館の正月は

1

明けて六十二歳のめでたい正月が来た。

正月がなんでめでたいのかわからないという人がこの頃、とみに増えて来ているようで、タクシーの運転手、歳末のプラットホームのベンチで隣り合せに坐った人、作家の中山あい子さん、インタビューに来た婦人記者、都合四人の人から私はここ数日のうちに同じ言葉を聞いた。

「なんでめでたいんだかねぇ。元日だって昨日のつづきに過ぎないんだからね！　バカバカしい！」

とタクシーの運転手は憤激の気味だった。プラットホームのベンチに隣り合せに坐ったご婦人は、

「ほんとに気忙しいばっかりで……年をとることがなんでおめでたいんでしょうかねぇ……」

と詠歎調。要するに正月というものは子供と娘のためにあるようなもので、中年以降はただただ気忙しく煩わしく、来てほしくないものなのである。

しかし、そうはいいながらも、正月が来ると「おめでたい」というのが我が国の昔からのしきたりとして絶えることなくつづいて来た（あの空襲に明け暮れた時代でも正月には「おめでとう」といい合ったくらいであるから）ことを思うと、心の内はともかくとして、やはりニコニコ機嫌のいい声で、

「明けましておめでとうございます」

といい合う。相手が「おめでとうございます」といっているのに、「こんにちは」というのには勇気が要るのである。

その点、幼い子供のいる家庭は自然に正月をめでたがられるからいい。幼な子がまわらぬ口で、

「オメデトウゴザイマチュ……」

「あらまあ、お上手ねェ、ハイ、おめでとうございまちゅ……」

「アハハハ」

「オホホホ」

一陽来復という趣である。チビがおめでとうといっただけで、なにもそう嬉しがって大笑いするほどのことはないじゃないか、と文句をつけたくなるのは、「人ナミの幸福」から縁遠いところで暮している証拠であろう。

要するに正月というものはそういうものなのだ。他愛のないことで笑う——それが多分「幸せ」というものなのである。

ところで我が家も、正月くらいは「人ナミ」に、という気持で、大晦日にはおせち料理を作り、家の内外を清掃して元旦を迎えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

考えてみれば当年二十ン歳の娘が小学校へ上るか上らぬの頃、私は娘の父親、当時、夫であった男と別れた。以来、はや十七年の月日が経っている。離婚当時は「文学主婦」であった私が、離婚をきっかけに少しずつものを書くことを生業とするようになり、どうにかこうにかここまで娘を育ててきた。

母親がフツーでないための、欠点はいろいろあるにしても、暴力にも走らず、テテなし子を産むこともなく、どうにかここまで母娘二人無事に生きてこられたということは、やはり「めでたい」といわなければならないだろう。

そこでおせちの重詰を前に母娘でお屠蘇を祝い、

「おめでとうございます」

「おめでとう」

「昨年中はいろいろお世話さまになり」

「有難うございました」

「本年もよろしく」

「お願い申します」

と掛合で挨拶を交す。これも浮世の義理だ。普段、何のかのと二言目には世の中に逆らって暮しているから、元旦くらいはその埋め合せをしようというような気持である。娘はお屠蘇を一口飲み、

「うッ！　まずい！　なんだ、こりゃ」

そのお屠蘇は年末に新聞販売店から貰ったのをあり合せの酒にほうり込んだものだ。

「屠蘇という言葉はね、鬼気を屠絶し、魂を蘇生せしめるという意味なんです。まずくても飲んで、いざ鬼気を屠絶せしめん！」
と私はいささかの学を披瀝して満足である。私の機嫌がいいのは娘が漸くおせち料理や雑煮を作れるようになり、今年の元日は娘が生れてからはじめて、私が台所へ立たずにすんだ正月だからである。
我が愚娘もやっと、どうにか役に立つようになったのだ。しかしやっと役に立つようになったと思うと、どうやら嫁に行ってしまう年が来ている。
「方々からお話がいろいろ、来ているんでしょうねえ。いいお話ありました？」
という人などもチラホラいて、私はムカつく。ムカつくのは、娘を嫁にやりたくないからでは決してなく、「いいお話」など何も来ないからなのである。
「えっ？　お話がない？　まさか！」
と相手が大仰にびっくりするのも面白くなく、なにさ！「あのお母さんがついてるんじゃ、来る話も来ないんじゃないの」、と蔭でいってるくせに……などと邪推してますますムカムカする。
「失礼ですけど方々へお写真など、配っていらっしゃるんでしょう？」
と訊かれ、
「そんなもん、配ってませんよ！　通信販売のチラシじゃあるまいし」
と答える言葉には怒気が籠るのである。
「まっ、写真、配っていらっしゃらないの？　方々へお頼みになってないの？」

「そんなもん、頼んでませんよ！」
「まあ！　それじゃあお嬢さんがお可哀そうだわ。そういうことはお母さまがなさらなくちゃ……」
「そんなこといったって、いったいどこへ頼むんですか、それがわからないもの」
「ですから、お知り合いとか、お世話好きの方とか……とにかく、あちこちへお頼みになっておかないと」
「私は元来、世話好きの奥さんていうのが嫌いでね。世話好きというと、なぜか出しゃばりと決っていて、自分の思う通りにいかないと怒ったりするんですよ。私の幼な友達に気の弱い人がいて、近所の世話好きにひっかかって断るに断れず、行きたくもない男のところへ強引に嫁に行かされた人がいたけれど」
「でもその方、お幸せになられたんでしょう？」
「幸せかどうかはわからないけれど、二男二女を産んで、今は孫に囲まれていますよ」
「お幸せじゃありませんか！」
と相手は勝ち誇ったようにいう。
「若い時は泣く泣く行ったかもしれないけれど、要するに人間の幸福なんて、一生の終りまでいかないとわからないものなんですから。やはり世話好きの人は、世間というものをよく見ていますからねぇ。間違ったことはいわないんですね」
と熱心にいうところを見ると、その人も世話好きにちがいないのであった。

2

ところで私の家には、若い男は寄って来ないが、なぜか若い女性がワヤワヤと集って来る。その中には娘の友達もいるし、私の読者だという人もいるし、女性編集者、カメラマン、デザイナー、いろいろいる。結婚生活を経験して独身に戻った人、恋愛は数多く経験したけれど、結婚は一度もしていないという人、見合マニアともいうべき人（しかしこれは、考えてみると、決してマニアというわけではなく、何度見合をしても断られるので外目にはマニアに見える、あるいはマニアに見せているといった方がいいらしい）、結婚も恋愛もしたことのない人、結婚も恋愛もしたことがないのでいざこれからよ！　と夢と期待に溢れている人。したことがないので逆にヤケクソになって、「そんなもん！　しませんよ！　したくないッ！」と頑張っている人、これまたいろいろいる。

中野尚子さんは二十ウン歳、我が娘より二歳年上であるが、なぜか寝ても醒めても恋愛に憧れていて、それ以外は何も考えないという人である。故郷は九州だが、東京へ出て来て叔父さんの家から毎日私の家へ手伝いに来る。私の方ではべつに手伝いが必要ではないのだが、来たいというので来るに委せている。来る者拒まず去る者追わず、というのが私の主義だ。

尚子さんは小説家志望だが、恋愛の讃美者憧憬者であるから、彼女の書く小説はすべて恋愛がテーマである。今年も新年早々、百二十枚の小説を書き上げたといって、抱えて来た。題名は「エンドレスラブゲーム」という。

どういう小説かというと、女主人公には新聞記者の恋人がいるが、どういうわけか愛し合いながらも電話でおしゃべりをするばかりでそれ以上は関係が進まないという間柄なのである。
「君って、面白い人だなァ」
「あらひどい、久しぶりで電話をしたのに、面白い人だなァだけ？　もっとほかにいいようがないの？」
「マイったマイった、アハハ」
「オホホホ」
というような会話だ。その会話にどういう意味を持たせているのかと訊くと、つまり「そういうウイットに富んだ冗談をいい合う二人なのです」という。私にはそれがべつだん「ウイットに富んだ冗談」とも思えないのだが。
ともあれそういう会話が延々とつづいて、ついに、
「いったいぼくに何をいわせたいの？　愛してるとでもいわせたいのかい？」
「会いたいと、それ一言いわせたいのよ」
ということになり、二人ははじめてラブホテルへ行く。そして「ジャングルの間」という部屋へ通される。
「ジャングルの間！」
と私は驚いた。
「何なの、このジャングルの間というのは！」
いい忘れたが、尚子さんは私と娘の前でこの小説を朗読しているのである。尚子さんは高校の

頃、放送部にいた。その頃の尚子さんの夢は観光バスガイドかウグイス嬢になることだったという。それからディスクジョッキーのスターを夢見たこともある。機会があれば演劇もやってみたいという。尚子さんはおしゃべりをする職業が好きなのだ。だがなぜその夢に向おうとせず、沈黙の仕事である小説家を志望するようになったのかは私にはわからない。私にわかることは、小説家を志望している尚子さんだが、書き上げた小説を朗読する時、その声は恍惚の波間を揺蕩(たゆた)うていることくらいだ。もしかしたら尚子さんは、朗読がしたいために小説を書くのかもしれない。

話は横に逸れたが、そういう次第で、「エンドレスラブゲーム」の尚子さんの朗読には熱が籠っていったのである。

「何なの、ジャングルの間というのは！」

私の叫びに尚子さんは気分を中断されて、ちょっと不機嫌な皺を眉間に寄せ、

「ラブホテルにはそういう名前の部屋があるって、週刊誌に出てました」

という。

「ほかに砂漠の間とか、草原の間とかあるそうですけど、私はジャングルの間にしてみたんです」

尚子さんは面倒くさそうにいうと、

「ジャングルの間は鬱蒼として暗く、その中に足を踏み入れたユカリは、くらくらとめまいがして、思わず民樹の胸にくずおれてしまったのだった」

と次を読んだ。ラブホテルの部屋の中が「鬱蒼としている」というのは、いったい何によって鬱蒼としているのか？　鬱蒼とするほど部屋の中に何があるのかと私は訊きたい。しかし訊く隙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com